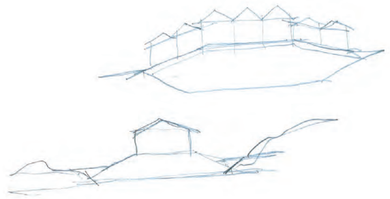
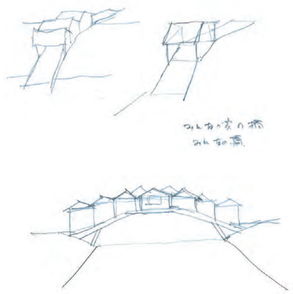
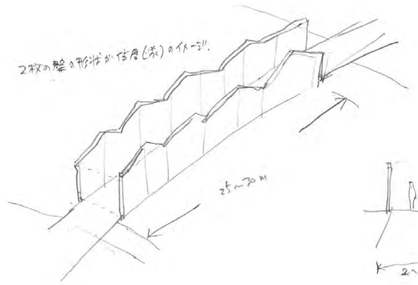
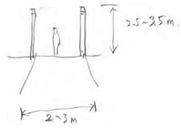
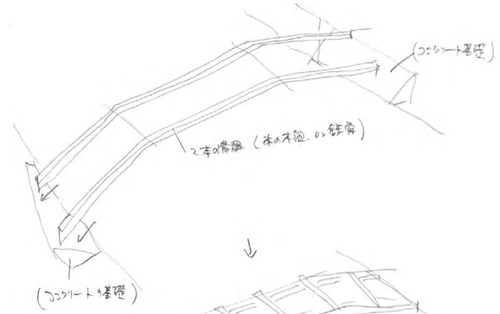
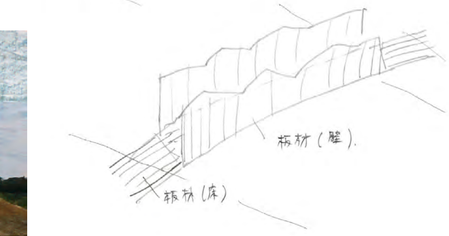


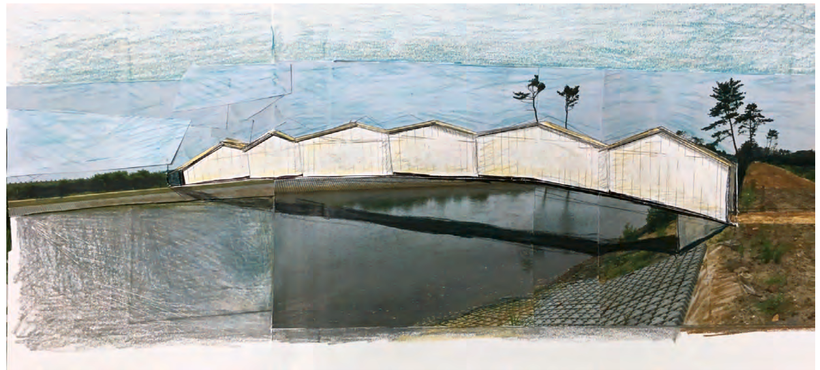




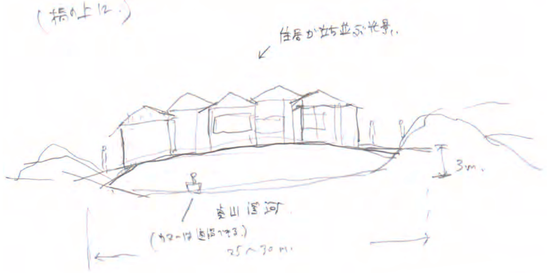


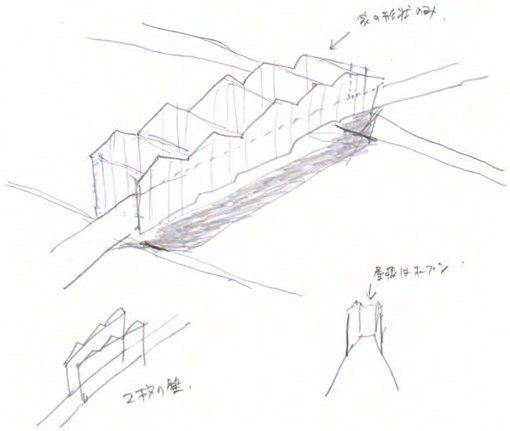


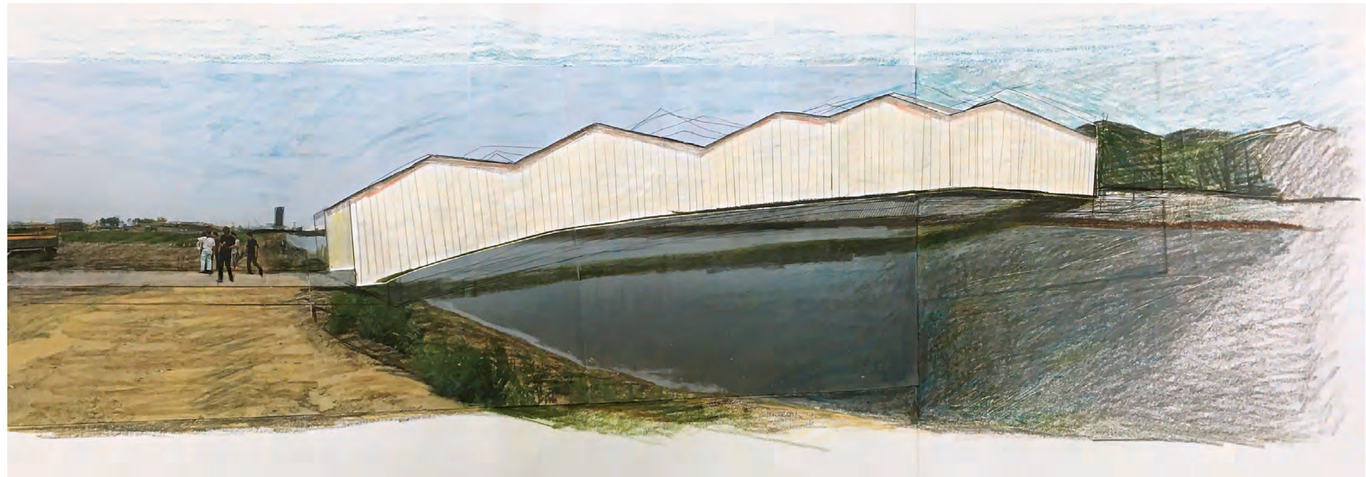




みんなの橋 ― いくつかの住居が並んでいる
(橋の上に)







すべての加重は、両側に持っていく。

、運河の中にポストを立てており、

せんだい・アート・ノード・プロジェクト　川俣正 仙台インプログレス・新浜『みんなの橋プロジェクト』ドローイング(2017) © Tadashi Kawamata

参加者募集中

青少年のための生きる技術としてのゲージツ学校

おもに高校生を対象とした、「聴く技術」によって社会との関わりを考えていくゲージツの学校です。せんだいメディアテーク館長の鷲田清一が校長、仙台出身の美術家タノクオガと、在仙のラッパーHUNGERが講師を務めます。今年度は、美術と詩の2つの専攻をひらきます。

【開催日】2017年8月11日（金・祝）～9月24日（日）全7回
【時間】各回14:00～16:30
【場所】せんだいメディアテーク、東北リサーチとアートセンター（TRAC）
【対象】15～20歳程度（原則として高校生を優先とします）
【参加】無料（要事前申込）
【定員】20名（18歳以下は保護者の同意が必要）
【申込】氏名、住所、年齢を明記のうえFAXまたはEmailにて受付（応募多数の場合抽選）、8月1日締切
＊詳細は7月22日のガイダンスでお知らせします。

◎「聴く技術」鷲田清一校長によるガイダンス
7月22日（土）14:00-15:30
【会場】せんだいメディアテーク7階スタジオa
参加自由、申込不要、席数40席程度

【申込・お問い合わせ】
せんだいメディアテーク 企画・活動支援室
TEL：022-713-4483　FAX：022-713-4482
Email：office@smt.city.sendai.jp

JOURNAL

art node
artnode.smt.jp

アートノード　ジャーナル　2号　2017年7月20日 発行
編集長｜甲斐賢治（せんだいメディアテーク）
編集｜澤井真矢、渡邊萬次郎（せんだいメディアテーク）／長内綾子、高橋創一（communa）
アートディレクション・デザイン｜thomesickdesign
印刷｜東北紙工株式会社

お問いかせ・企画・発行
せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市民文化事業団）
〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1／TEL：022-713-4483
E-mail：artnode@smt.city.sendai.jp／URL：http://www.smt.jp

アートノードとは、「優れたアーティストのユニークな視点と仕事に多くの人が関わり、熱のある『アートの現場』を仙台に創出する事業です（2016年度～）。
本紙ジャーナルは、アートノードの議論を広く伝えるとともに、アートが東北の人・資源・課題と接続するための話題提供を行います。
※「アートノード」は「せんだいアート・ノード・プロジェクト」の略称です。

せんだいメディアテーク
sendai mediatheque　仙台市市民文化事業団設立30周年記念事業

© 2017 sendai mediatheque All Rights Reserved. 本紙記事・写真・イラストの無断転載を禁じます
この用紙はリサイクルできます。

art node TALK
アートで文化の今を聞く

昨年度、好評をいただいたアートノードのTALKシリーズ。今年度も、在仙の協働企画者とともに8月から順次開催します。最新情報はウェブサイトをご覧ください。
主催：せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）

ふたつの「father」
【ゲスト】金川晋吾（写真家）
西澤諭志（映像作家・写真家）
2017年8月26日（土）18:00-20:30
【会場】SARP 仙台アーティストランプレイス（仙台市青葉区錦町1-12-7 門脇ビル1F）
【参加】500円（要予約、先着25名）
【企画・運営】仙台アーティストランプレイス
【申込】koiw@jcom.home.ne.jp（小岩）
実の父の失踪を扱った写真家の金川氏と、その撮影過程を記録した映像作家の、展示および上映に合わせた討談を開催します。

台湾インディペンデントシーン、進化するリトルプレス
【ゲスト】永岡裕介（イラストレーター）
陳瑩羽（三輝書店）
中山亜弓（書店タコシェ）
【聞き手】大林えり子（ブックギャラリーボボタム）
2017年8月27日（日）18:30-20:30
【会場】book café 火星の庭（宮城県仙台市青葉区本町1-14-30）
【参加】1500円＋ワンドリンクオーダー（要予約、先着30名）
【申込・企画・運営】book café 火星の庭
kasei@cafe.email.ne.jp
台湾のインディーズ・パブリッシャー「nos:books」をはじめ、台北の創作環境、書店事情、日本との関わり等を紹介するトークを開催します。

あそぶ、こども、あーと ～創造力を引き出す教育～
【ゲスト】佐真巧（アーティスト／アートイズ）
沼尾大伸（認定こども園三沢第一幼稚園／アートイズ）
木村創（認定向山こども園）
2017年9月9日（土）14:00-16:00
※13:00から向山こども園ガイドツアーを行います。
【会場】認定向山こども園（仙台市太白区八本山緑町21-10）
【参加】大人500円／高校生まで200円（要予約、先着30名）
＊0～3歳のお子様同伴の方は大人も無料、お土産付き
【企画・運営】千田優太（一般社団法人アーツグラウンド東北）
【申込】jaga3tyu0721@gmail.com（千田）
八戸市にて現代アートの視点で学びの場をひらく「アートイズ」。子どもたちの創造性を引き出す遊びの場づくりを実践するゲストとともに、実践を交えながらアート／遊び／教育について考えましょう。

渡辺萬次郎さんの風景スケッチ

伊達伸明

渡辺萬次郎（わたなべ・まんじろう）
1891年福島県生まれ（1980年没）。日本の鉱床学の進展に多大な寄与をしただけでなく、スケッチや短歌をたしなみ、多くの著作を残している。

『緑を惜しんで 4』（宝文堂,1979）

展覧会
萬次郎さんの仙台風景スケッチ
【企画制作】伊達伸明（美術家）

東北大学理学部長や、秋田大学学長などを歴任した渡辺が昭和に移りゆく仙台の風景を描き留めたスケッチを紹介します。
※会期中、トークなどの関連イベントあり

2017年9月8日（金）～24日（日）
11:00-18:00（休室日：9/11,12,19,20）
【協力】仙台市歴史民俗資料館

【会場】
東北リサーチとアートセンター（通称TRAC）
仙台や東北の歴史・資源・課題などを調べ、アートや表現につなげる活動と交流のための拠点です。せんだいメディアテークが運営パートナー「やわらかな土から」（一般社団法人NOOK、NPO法人エイブル・アート・ジャパン、3.11オモイデアーカイブ）とともに事業を展開しています。

〒980-0804仙台市青葉区大町2-3-22第五菊水ビル3階／TEL＆FAX：022-397-7256（あらに水～日曜11-18時開室）／Email：artnodeTRAC@gmail.com
※開室日はウェブサイト（URL:http://trac.smt.jp）等でご確認ください。最寄駅：地下鉄東西線［大町西公園駅］東1出口（徒歩1分）

伊達伸明（だて・のぶあき）美術家。1964年兵庫県生まれ、大阪育ち。2000年より、取り壊される建物から生活痕の残る材料を用いてワクチンレを制作し、元の住人に手渡していく「建築物ウクレレ化保存計画」を主宰。仙台では2012～2015年に「亜炭書古学」を実施。

ここに、仙台の風景が描かれた1枚のスケッチがあります。二ツ沢を見下ろす萩ケ丘の高台から描かれたもので、遠景には蔵王、中景には緑ケ丘の街路やカラートタン葺きの屋根が見える、昭和40年代のごく日常的な風景です。宮交自動車学校はまだありません。そして絵の角には「M.Watanabe」。

私は今までにも一度この画風に出会ったことがあります。鹿落断層を対岸からスケッチしたもので、周辺の複雑な地層構造を描く端正な筆運びと簡潔で的確な挿入メモが心に残りました。どんな人だろうと思って調べてみると、その人は画家ではなく、東北大学で長年鉱床学の研究に携わり、理学部長や日本地質学会会長、退官後は秋田大学の学長として秋田大学鉱業博物館の設立に尽力した渡辺萬次郎」という著名な科学者だったのです。さらにそのスケッチが仙台全域を網羅して膨大な数量にのぼることを知って驚きました。

秋田から戻った萬次郎氏は、急変する仙台の風景に危機感を抱き、その姿を描き留めておこうと思い立ったそうです。

「幸い筆者は地学の一端を専攻した関係上、その実習のため数十年来これらの山地を巡歴し、この造成期には公職を退き、なお健康を保持したので、せめて変貌の姿でも筆に止めようと、この10数年余生のすべてを挙げてみた。」（スケッチ集『緑を惜しんで』まえがきより）

人が絵を描く動機はさまざまですが、「表現」をめざす場合、描けば描くほど、次第にどれも似てくることに気づくと、そのうち飽きて筆を止めるか画風の脱却を図ろうとしがちです。しかし萬次郎氏は科学者として目前の風景を忠実に真摯に同じ画風で描き続けました。時には色が着いたり注釈が添えられる場合もありますが、それらからも画業としての高揚感よりむしろ、記録者としての使命感がひしひしと伝わってきます。

9月8日（金）から私の企画で「萬次郎さんの仙台風景スケッチ」展を東北リサーチとアートセンターで開催します。近年復刻物の写真集や古地図が評判になる中、なぜか氏の作品は、現在でも限られた著作物でしか目にすることが出来ません。しかしこめられたメッセージや往時のたたずまいが現在の仙台に「滋味あふれるインパクト」を与えてくれるにちがいありません。是非お越しください。

『雑がみ』をもっとリサイクルしたい！

ある日、アートノード事務局に一通のメールが届きました。送信者は仙台市環境局の某氏。環境局では日頃からごみの分別向上のため、さまざまな施策を行ってきたものの、『雑がみ』の回収率が上がらず悩んでいるとのこと。そこで詳しく現状を伺い、せんだいメディアテークが出した答えは……。

リサイクル×アートといえば、藤浩志さん！

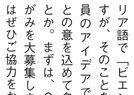
アーティストの藤浩志さんは、これまで各地でローカルの課題に向き合い、「システム」と呼ばれるさまざまな循環型プログラムを実施してきました。その代表作として、いらなくなったおもちゃを楽しく交換する仕組み「かえっこ」が有名ですが、造形作家として、集まりすぎたプラスチックトイや、ポリエチレン系コミを使い、魅力的な作品づくりも行ってきました。

そんな藤さんなら「雑がみ」から（THATの神）な作品が生まれるのではないか!?　そんな思いで、環境局＋せんだいメディアテークとの協働が始まったのでした。

そもそも、『雑がみ』ってなに？

仙台市が回収する紙類には5つのカテゴリーがあります。

① 新聞＋折込チラシ
② 段ボール
③ 紙パック
④ 雑誌
⑤ **雑がみ**



そう、この⑤こそ、今回のお題である『雑がみ』です。具体的にどんなものか、みなさんパッと想像いただけるでしょうか？　例をあげると、お菓子・食品・ティッシュ等の紙箱、封筒、トイレットペーパーやラップの芯、コピー用紙、台紙類、包装紙、メモ帳など、①～④には入らないけれど、油汚れのない再生できそうな紙、ということになります。

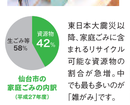
面倒だからってごみ扱い!?

例をみて、多くの方が「あっ！もっと捨てちゃってるアレね」と思ったことでしょう。そうなんです、ちょっと面倒な気持ちを誘発するアレのことなんです。しかし、限られた資源の節約が叫ばれるいま、リサイクル可能な『雑がみ』の回収率を上げることで、未来への財産を少しでも多く残せるように、アーティスト藤浩志さんの知恵を借りてみよう！　それが本プロジェクトの趣旨となります。

成果は来年1月開催の「資源ナーレ」でお披露目

プロジェクトの成果は、環境局が2018年1月に開催を予定しているリサイクル推進イベント「資源ナーレ」にて発表予定です。2年に1度開催される美術展のことをイタリア語で「ビエンナーレ」と呼びますが、そのことをご存知の環境局職員の皆さまを込めて名称が決定したのだとか。まずは、9月よりご家庭の雑がみを大募集しますので、その際にはぜひご協力をお願いします。

雑がみ



仙台市の家庭ごみの内訳（平成27年度）

東日本大震災以降、家庭ごみに含まれるリサイクル可能な資源物の割合が急増。中でも最も多いのが『雑がみ』です。

仙台市には『燃えるごみ』という区分はありません。正式名称は「家庭ごみ」。その家庭ごみには資源物を入れないのがルールですが、まず一度、資源物の分別に取り組みたくなるイベント「資源ナーレ」の開催をお楽しみに♪

いらなくなった、おもちゃやペットボトルがアート作品に！

［上］ボランティアで集まった住民たちとともに、地域のペットボトルコミを使った彫刻作品を制作し、外灯をデコレーション！
「サイト・サンタフェ・ビエンナーレ」での展示風景
サンタフェ、アメリカ（2008）

［右］大量に集まった某ファストフード店のプラスチックトイなどを、色や形ごとに整理、ときに合体させて驚きのインスタレーションが完成。
「ハッピーパラダイス」
金沢21世紀美術館（2015）

藤浩志（ふじ・ひろし）1960年鹿児島生まれ。全国各地のアートプロジェクトの現場で「対話と地域実験」を重ねる。同大学院修了後パブアニューギニア国立芸術学校勤務。都市計画事務所勤務を経て92年藤浩志企画制作室を設立。数々の国際展への出品参加をはじめ「地域資源・遺性技術・協力関係」を活用したプロジェクト多数。現在、秋田公立美術大学教授。NPO法人プラスアーツ副理事長。http://geco.jp/

仙台インプログレス at 貞山運河
川俣正の「みんなの橋（ノード）プロジェクト」が始動！

国際的に活躍するアーティスト・川俣正によるが、日本での新たなプロジェクトがここ仙台でスタートします。川俣さんが選んだサイト（場所）は、東日本大震災の津波により、集落や耕作地が被災した仙台市東部沿岸地区に位置する「貞山運河」です。今号では、プロジェクトの概要とともに、土地に息づく人々の記憶をたどります。

貞山運河をリサーチする川俣さん（2016）

せんだいメディアテークが、震災から6年を経た仙台に熱のある「アートの現場」をつくりだすべく、2016年度より開始した「せんだい・アート・ノード・プロジェクト（略称：アートノード）」。これまで、展覧会やトークイベントなど、大小さまざまな活動をしてきましたが、今年度より、津波被災地区の課題に取り組む長期的な活動がスタートします。

協働するのは、サイト・スペシフィック（※）な作品を世界各地で展開するアーティスト・川俣正さん。昨年7月には、トーク「川俣正のアートプロジェクト」にて、地域社会がかかえる課題に向き合うプロジェクトのほか、歴史・習慣・記憶への介入をキーワードに、繊細かつ大胆な作品事例を多数紹介してくださいました（ジャーナル0号参照）。

そんな川俣さんが、仙台市東部沿岸地区を訪問し着目したのが「貞山運河」です。震災により堤防や護岸が著しく破損し、現在は宮城県が復旧工事を進めています。

リサーチの中で、運河に隣接する新浜地区の住民から「橋が津波で流されて運河を渡れなくなった」という話を聞いた川俣さん。そこから構想したのがプロジェクト第一弾となる「みんなの橋プロジェクト」です。「橋の機能を持った作品」の完成を目指します。浜辺の暮らしと海をつなぐ橋は、震災の記憶と私たちを結びつける伝承の遺筋となるだけでなく、被災地への関心や交流を引き寄せ、新たな希望を見いだすための結節点（ノード）と呼べるかもしれません。詳細は、8月11日（金・祝）に、川俣さん自ら登壇するアートノード・ミーティング03で発表しますので、ぜひご期待ください。

※その場の諸条件で作品が成立するため、そこでしか見たり体験することができない作品のこと。

地域の皆さんからヒアリング（2016）

東日本大震災の津波により破損した、かつての橋（写真：遠藤源一郎、2011）

表面のスケッチを元に制作された「みんなの橋」模型

川俣 正（かわまた・ただし）
1953年北海道三笠市生まれ。1982年第40回ヴェネツィア・ビエンナーレ、1987年ドクメンタ8はか出品多数。2005年横浜トリエンナーレ総合ディレクター。現在はフランス、パリ国立高等芸術学院の教授。既存の美術表現の枠組みを超えていく試みを実践してきた、海外でもっともよく知られている日本人アーティストのひとり。http://www.tadashikawamata.com/

川俣作品における「橋」

「橋」、それはあちらとこちらを結ぶもの。「危ない橋も一度は渡れ」「石橋を叩いて渡る」といったことわざや、「橋渡し」のように人間関係をあらわす場合にも用いられたり、これまで多くの文学作品や映画で橋をモチーフにした作品がつくられてきました。

川俣さんは自身の作品について、著作で次のように語っています。

「より現実の世界に近いものとしてつくられるが、同時にそこから遠いものとして存在するように設置される。いわば日常に近いが日常の縁にあるものとしつつ、そしてそこから『普通なこと』を普通にやっていながら、すごく普通でない感じ」を形作ることになる」

はたして、今回のプロジェクトではどんな作品が生まれるのでしょうか。ここでは、川俣さんの「橋」にまつわる作品を、3件ご紹介します。

【参考】川俣正『アートレス・マイメイリティ』としての現代美術」（フィルムアート社、2001）
アートノード『ALK』川俣正のアートプロジェクト」（2016）

「Sidewalk」
オーストリア、ウィーナー・ノイシュタット（1996）
歴史ある街中の広場に沿って、ガス管のように張り巡らせられた遊歩道。街からのオーダーでプロジェクトがスタートし、地元の建築学生30人とともに約1ヶ月をかけて制作。車椅子でも登れるスロープが必要との声に応じ、予定よりさらに規模が拡大した。約2年間におよぶ準備期間中、関係各所との調整を経て、さまざまな課題をクリアしながら制作された作品。

「Foot Path」
フランス、ボルドー（2009）
2009年10月にボルドー市で開催された、都市創作ビエンナーレに参加した際の作品。市内のカンコンス広場からガロンヌ河に至る、全長120mの木製の橋。ボルドーのあるアキテーヌ地方に多く分布する「海岸松」と呼ばれる木材を使用している。この橋は、ビエンナーレ会期のわずか1ヶ月間で解体され、使用した木材は地域の材木市場で再び販売された。

「Bridge Walkway」
スペイン、バルセロナ（1996）
建築家リチャード・マイヤー氏の設計によるバルセロナ現代美術館（MACBA）は、真っ白な面で構成された建物で、迷路のような旧市街地に突如現れた異種な現代建築。美術館のオープン展で発表されたこの橋のような作品は、アートの形而上的世界を表現するかのような真っ白な美術館と、カラフルで世俗的な通りの建物とのコントラストを、観客がじかに体験する装置となっています。

貞山運河と浜辺の暮らし

貞山運河は、伊達政宗公の命により開削が始まり、東名運河、北上運河とともに総延長約49kmにわたり仙台湾沿岸をつなぐ日本一の運河群のひとつとして知られています。古くは舟運を目的として建設が始まったもので、歴史、環境、景観等の魅力を有する土木遺産です。

明治5年に完成した名取川の関上と七北田川の湧生を結ぶ貞山運河（新堀）は、子どもたちが水遊びをしたり、炊事や洗濯に活用したり、ハゼやウナギなどの釣りを楽しむ場でもありました。

しかし、震災による津波で護岸や橋が破壊され、運河に隣接する集落の一部は、災害危険区域に指定されたことで、人が再び住むことができなくなりました。

現在、仙台平野でもっとも浜に近い集落のひとつが「新浜」です。

その住民たちが中心となり、まち歩きや自然観察会などを重ね、地域の魅力や歴史遺産をまとめたパンフレット『ふるさと新浜マップ』を2016年に発行。さらに今年6月には、イベント「新浜の渡し船とフットパス」を開催しました。

昭和30年代後半までは、貞山運河を渡る橋が集落の近くになく、浜への行き来には「馬船」と呼ばれる箱型の船が用いられたそう。当時をイメージした渡し船を体験しつつ地域を散策することで、地域資源の掘り起こしとにぎわいづくりにつなげるべく、イベントは今後も月1回の開催が予定されています。

貞山運河での渡し船（2017）

【参考】『ふるさとマップ』（若林区まちづくり推進課、2013）／貞山運河再生・復興ビジョン（宮城県、2013）

art node MEETING
自由参加型公開会議

アートノード・ミーティング03
川俣正の「みんなの橋」プロジェクト
2017年8月11日（金・祝）13:30-15:00

【会場】せんだいメディアテーク1階 オープンスクエア
【参加】無料・申込不要・直接会場へ
【出演】川俣正（アーティスト）
甲斐賢治（せんだいメディアテーク アーティスティック・ディレクター）

地域で展開するアートプロジェクト「アートノード」にまつわるあれこれを公開し、より多くの意見や視点を得て、その意義をみなさんとともに深めていくイベントです。今回はアーティストの川俣正氏が、東日本大震災の津波被災地区で橋をかける「みんなの橋プロジェクト」について紹介します。

（助成）損保ジャパン日本興亜「SOMPO アート・ファンド」（企業メセナ協議会 2021 Arts Fund）